

## 下田南遺跡 遺跡発掘

令和8年6月議会  
一般質問補足資料  
10番 井上真砂美

下田南遺跡は、愛知県岩倉市南西部の川井町に所在する。

愛知県教育委員会、岩倉市教育委員会によって平成28～29年に試掘調査が実施された。調査の結果、土坑・溝等の遺構と須恵器・土師器・山茶碗等の遺物が確認され、周辺の地形からみて旧五条川の自然堤防に形成された古墳時代から中世にいたる集落跡が所在するとして、愛知県埋蔵文化財包蔵地台帳への新規記載が行われた。

遺跡の発掘調査・整理作業は、令和元年6月24日付で岩倉市と株式会社アーキジオ中日本支店との間で業務委託契約が締結され、岩倉市教育委員会の監理のもと令和元年6月24日～令和5年3月21日の期間で実施することになった。

第1期：発掘調査 令和元年6月25日～令和2年3月31日

第2期：発掘調査 令和2年4月1日～令和3年3月31日

第3期：整理作業 令和3年4月1日～令和4年3月31日

第4期：整理作業・報告書作成 令和4年4月1日～令和5年3月21日)

(資料；下田南遺跡発掘調査報告書)

**第1回現地説明会**：一般を対象にした調査成果の初回報告として、令和元年2月15日の9時～15時にかけて第1回現地説明会が開催された。掘立柱建物、竪穴建物・掘立柱建物群、道路状遺構などの飛鳥～古代を中心とした遺構の調査成果と出土遺物が公開され、見学者は568人であった。



**第2回現地説明会**：一般を対象にした調査成果の中間報告として、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策として密集を防ぎ口頭説明を行わないなどの制限を設けて、第2回現地説明会を令和2年10月3日の9時～15時にかけて実施された。溝、竪穴建物・掘立柱建物などの飛鳥～古代にかけての遺構、中世以降の遺構検出状況といった調査成果と出土遺物が公開され、見学者は229人であった。

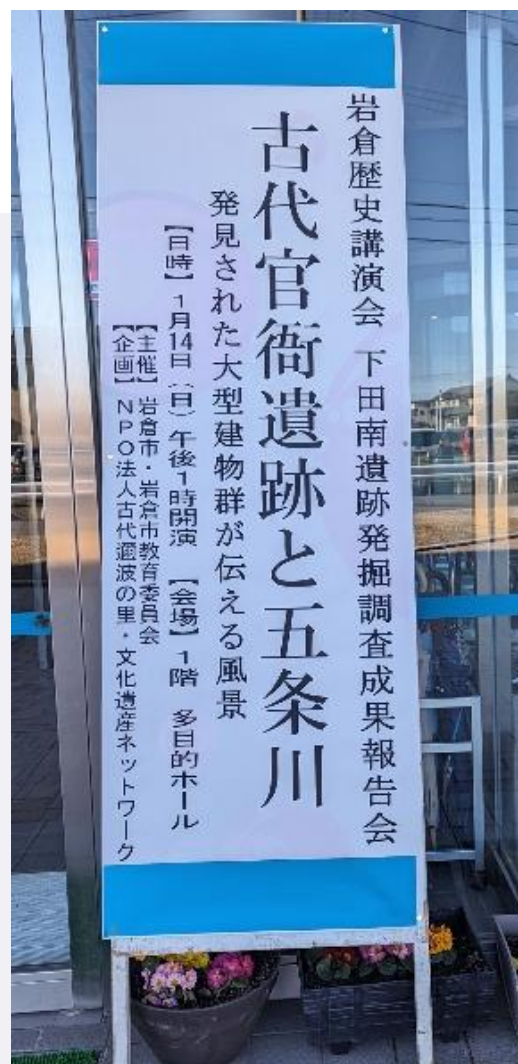
**第3回現地説明会**：一般を対象にした調査成果の最終報告として、第2回現地説明会と同様に新型コロナウイルス感染症拡大予防対策として密集を防ぎ口頭説明を行わないなどの制限を設けて、第3回現地説明会が令和3年1月16日の9時～15時に実施された。中世以降の溝・土坑などの遺構の調査成果と全ての調査区から出土した代表的な出土遺物が公開された。見学者は164人であった。

(資料；下田南遺跡発掘調査報告書)



# 下田南遺跡発掘調査報告会

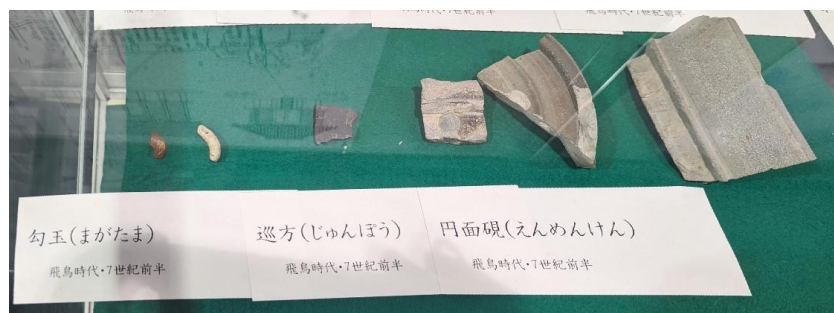
令和6年1月14日



下田南遺跡は、五条川右岸の自然堤防上に形成された古墳時代、飛鳥～平安時代、鎌倉・室町時代の集落遺跡で、飛鳥～奈良時代の官衙遺跡でもある。

本調査では、総柱構造を含めた掘立柱建物、竪穴建物（うち1棟は一辺約13mの大型竪穴建物）、土坑、竪穴状遺構、道路状遺構、溝、ピット等の遺構が確認できた。遺物は、古墳時代の土師器台付甕や埴等、飛鳥～平安時代の須恵器坏・蓋・鉢・壺・甕・円面硯、土師器坏・甕、灰釉陶器、製塩土器、羽口、土錘、瓦（軒丸瓦・平瓦）、勾玉等の玉類、巡方（石帯）等、鎌倉・室町時代の山茶碗・土師器甕・サイコロ・ウマ歯等が出土した。須恵器や山茶碗の坏類を中心に、墨書土器が17点確認できた。

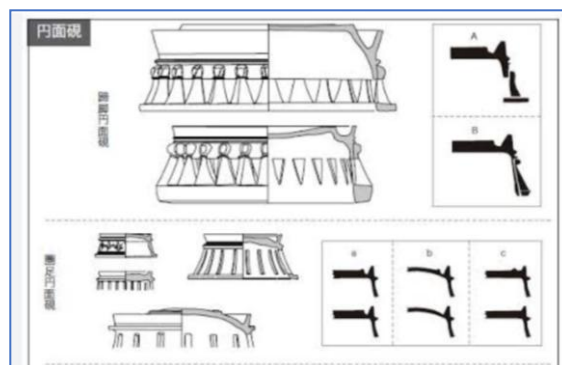
出土遺物から遺構の年代は、概ね 弥生～古墳時代中期（Ⅰ期・2～4世紀、Ⅱ期・5世紀）、古墳時代後期～奈良時代前半（Ⅲ期・6世紀～7世紀中頃、Ⅳ期・7世紀後半～8世紀中頃）、奈良時代後半～平安時代（Ⅴ期・8世紀後半～9世紀初頭、Ⅵ期・10～12世紀）、鎌倉・室町時代（Ⅶ期・13世紀、Ⅷ期・14～15世紀）のⅠ～Ⅷの時期に細分でき、集落の変遷過程が明らかになった。特にⅣ期では官衙遺跡としての実態が明らかになり、本遺跡の西側に位置する薬師堂廃寺跡出土の軒丸瓦と同汎瓦が出土したことも含めてその関連が窺い知れる。さらに、調査区南端で近代以前の旧五条川と推定される自然流路の存在が明らかになった。（資料；下田南遺跡発掘調査報告書）



勾玉 (まがたま)  
巡方 (じゅんぼう)  
円面硯 (えんめんけん)

## 蹄脚円面硯

半球形の脚頭が付けられていたと思われる。硯面は水平で外堤部が少し高く、突帯から外堤部端までの幅が広い。硯部内面は緩やかな曲線で凹凸は無く、内面に降灰が付着していることから倒置状態で焼かれたと考えられる。高蔵寺2号窯（春日井市）や平城宮 S D4951 から出土した円面硯と類似しており、共伴遺物からみても高蔵寺2号窯期（8世紀第1四半期）のものと考えられ、同じ窯で作られた可能性がある。また、断面には粘土の接合痕があり、突帯を含む硯部下半と、硯面と外堤が一体



となった硯部上半に分けられる。また、本遺跡から出土した円面硯3点の内2点が<sup>ていきやくえんめんけん</sup>蹄脚円面硯であるが、陶硯の種類は獣脚硯>蹄脚円面硯>圈足円面硯>転用硯の順に格式を現すとされ（西口壽生 2003・2010）、蹄脚円面硯については、地方では国府・郡衙やその関連施設からの出土が顕著である。本遺跡は郡家（評家）の出先機関と想定され、郡司層かそれに近い階層の官人が常在して、蹄脚円面硯を使用していた可能性が高い。しかし近隣遺跡からも同時期の蹄脚円面硯が出土していることから窺えるように、本遺跡周辺地域では他地域に比べて蹄脚円面硯が末端の官衙施設や寺院である程度は流通していた可能性が指摘できる。当地域は、蹄脚円面硯の生産地である尾北窯（春日井市・小牧市・犬山市）に近いことから、蹄脚面硯の流通においては特殊な地域の可能性があり、その流通範囲の広がりや使用者の階層などの把握が今後の課題と思われる。

（↑資料：下田南遺跡発掘調査報告書      ↓高床式倉庫）



↓資料：蹄脚硯 HP より

## 指定文化財詳細

ていきやくけん

### 蹄脚硯

指定区分	市指定有形文化財
地区	更北
所在	長野市小島田町（長野市立博物館）
年代	奈良時代（前半）
指定等年月日	昭和47年3月1日
地図	<a href="#">長野市行政地図情報へ▶</a>

サイトが別ウィンドウで開きます。

「同意する」ボタンを押すと地図が表示されます。

### 解説

昭和四十四年の県町(あがたまち)遺跡（県町576番地）調査で、奈良時代のもと考えられる掘って柱の建物跡の柱穴の一部から、破片で発見された。

復元後の大きさは口径20cm、台径29cm、器高12cm。円面硯(けん)で、二十五個の蹄脚(ていきやく)が硯面を支えている。

このような硯(すずり)は、時代的には奈良時代初期に限られており、宮殿・官衙(かんが)（古代の役所）跡から出土する場合が多く、県町遺跡の性格究明に大きな役割を果たしている。

同形式の円面硯が飯田市の恒川(ごんが)遺跡から発見されており、この地は伊那郡衙(ぐんが)跡と考えられているので、この蹄脚硯はあるいは水内郡衙の用品かと推察される。



正倉院正倉